

花、里、民家、

きょうなら

私の好きだった

風景

佐野昌弘

第六章

冬籠り

師走 (12月) 睦月 (1月)

梢に残る最後の葉が落ちて長い冬が始まり、
民家は同色の風景の中で
静かに春を待ちます、
やがて降り積もる雪が現実の姿を
すっかり変えてメルヘンの
世界に誘ってくれます。
民家が最も日本らしい
美しい姿を見せてくれる季節です。



京都美山町大野

茅葺き民家が綿帽子をかぶって、ちよつと雪化粧。
美山に降る雪は雪襖（ゆきふすま）
景色を優しく包んでくれる

雪が降って喜ぶのは「子供と犬とカメラマン」
朝早くから日暮れまで、
動く雪だるまの様になりながら
駆け回り走り回って
撮って回ります。



京都美山町深見

丹波地方を訪れると 畠の周りに

銀色のトタンを張り巡らして居るのを

良く見かける

猪の害を防ぐ為だ

ならば捕らえて 猪鍋にしよう



京都美山町原

写真屋さん ちょっと休みなよ

お茶が入ったよ

縁側からお婆ちゃんの声

湯飲みを持って 振り返るとこの風景

またゴソゴソと

写真屋は動き出す



岩手遠野土淵

お婆ちゃんの背中は 温かい

ボクの大好きを揺りかごだ

築後三百年と噂される

お婆ちゃんのお家の前で。



山梨忍野村

富士川型兜造りは富士山を

見本にしたと言われますが

納得



京都美山町大野

美山町の雪は優しい

白い悪魔とは無縁の雪

程よく、柔らかく里をくるんで

美しいオブジェの戯れる世界を

創ってくれる。

ご感想、お待ちしております。

佐野昌弘

masahiro.s@daccs